

共生学会

準備委員会

第一回

(議事録)

第一弾：6月17日(木曜) 12:00～13:00 (Zoom)

第二弾：6月18日(金曜) 19:00～20:00 (Zoom)

GROUP 1

■記録：桂悠介（阪大・共生学系：司会および記録）

稲場圭信（阪大・共生学系、補足）

■参加者（6名）：池端祐一郎（阪大・共生学系）、稲場圭信（阪大・共生学系）、岡本智周（早稲田大）桂悠介（阪大・共生学系）、寺本弘伸（認定 NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク専務理事）、向井慎一（JATO社執行役員）、稲場圭信（阪大・共生学系）

【趣意書に関して】

- ・ 共生と多文化主義、多元主義との違いが分からない（池端）
- ・ 英語で訳す必要もある。どう訳されるのか？（池端）
- ・ 分断や差別の克服など、腑に落ちる、納得できる違和感ない文面。（岡本）
- ・ 問題状況があるが仲良くやっていくというニュアンスが欲しい（岡本）
- ・ 「学生」以外の子どもも文面に入れてもらえたら。（向井、寺本）
- ・ 多言語、やさしい日本語がない（池端、向井、桂）
- ・ 署名がないので誰が書いたのか分からない（桂ほか）
- ・ 共生の意味が広い。ふわっとしている→企業的な視点からはより具体的に考える（向井）
- ・ 現状では漏れている人もいる、今後そういった問題も見えてくるかもしれない。（岡本、稲場ほか）

【共生学会に関して（期待・戸惑い）】

● 企業的な視点（向井）

- ・ 自分は異質かもしれない。勝手にわからない。どうかかわっていいか分からない。
- ・ 企業ではどうしても形になる成果が必要とされる。何か一緒に作ってあげたら。
- ・ 共生学会で、私たちにも役に立つ、役に立たれていることを知れるとよい。

● 実践者の視点（寺本）

- ・ NPO という立場から何をどう発表するか？という点で悩む。
- ・ 若い世代が関われる学会にしてほしい。
- ・ 今の社会では知識、経験、財産などまだまだ出し合えていない。
- ・ それぞれの持ち味を共有してあげたら。

● 研究者の視点（複数）

- ・ 「学会」が院生と教員しかわからないということ自体が問題。共に作っていききたい

【質問】

- ・ 共生学会は阪大人科の教員が中心になって議論されてきたのか（寺本ほか）
- ・ なぜ「日本」共生学会ではないのか？（寺本ほか）

GROUP 2

■記録：小川未空（阪大・共生学系）

■参加者（6名）：杉浦万正（共和メディカル）、國仲伸浩（中銀インテグレーション）、安田幸博（大阪トヨタ）、金相俊（阪大・共生学系）、大谷順子（阪大・共生学系）、栗本英世（阪大・共生学系）、小川未空（阪大・共生学系）

※企業関係3人、院生1人、教員3人

【趣意書について】

- ・ 高尚な記述で少し具体的な部分に分かりにくい。どのようなポイントが議論になるのか難しい。（杉浦）
- ・ 総論的な内容なので、これおかしいなどの異論は出ないのでは。（安田）
- ・ 共生をどのようにとらえるのか。広くするのか、狭くするのか。趣意書では広く捉えられているが、あまりに総論すぎると、感想が言いにくい。（國仲）
- ・ 人と人との共生の課題はイメージしやすいが、科学技術やモノなどが出てくると広すぎる気がする。
- ・ 電気自動車や自動運転など、実社会で応用されている技術が持っている課題などを考えることも、科学技術との共生に関わる具体例に含まれるのではないか。（小川）
- ・ 総論的すぎるという指摘があったが、それは意図したもの。提案させてもらった側からすると、「共生」に関わる問題を幅広く扱いたいという趣旨。（栗本）
- ・ 既存の学会では、社会への応用という視点が弱いものもあるが、共生学会では、それを重視している。実際の社会にこの学会がどのように関わり貢献するのかという点が趣意書に含まれていても良いのではないか。どのような社会を目指すのか、応用していくのかというビジョンに関わる表現が加われれば良いのではないか。（金）
- ・ 趣意書については広いので、どのようにそれを自分に取り入れるかがポイントでは。（金）

【共生学会とは？】

- ・ 学会とは任意団体であり、大学とは性格や目的が異なる組織。法人化した学会もあるが、共生学会については、まずは任意団体として出発をめざしている。（栗本）
- ・ 既存の学問分野に比べて、「共生学」というのは形成途上にある。カッコリと確立されたものではなく、今後作り上げていくもの。（栗本）
- ・ この学会では、当事者からの参加を期待している。医療や介護でいえば、患者や家族などの当事者。そのようなことは医療や介護関係の学会では考えられるか？（栗本）
→ターミナルケアとか癌サバイバーなど、当事者の参加が多い医療・看護系の学会はある。取り組みとして始まっている感じ。当事者に学会へ関わってもらおうということについて違和感はない。これらの学会では、専門職としての登録と「その他」としての登録があり、「その他」が活用されるケースもある。（杉浦）

→ただし、当事者が学会によばれたりなどはあるが、大部分は専門職。(國仲)

- ・ 共生学会のポイントとしては当事者が発表する、ということを想定している。具体的にどのように発表の場を設定するのは今後検討すること。(栗本)
- ・ SDGs のような総論的なモデルを作って、それに紐づくような実践を報告するという形はあり得るのではないか。(杉浦)
- ・ SDGs は後9年。そろそろポスト SDGs を議論する必要がある。そういう将来を見据えた議論が出来れば良いのではないか。(栗本)
- ・ 共生学会は、だれも明確な答えを持っておらず、しかし、誰もが考えなければならぬような課題を、実践的に考えるような場になるのではないか。(栗本)
- ・ コロナとの共生や、共生の反対は何なのか、とか考えたりしている。(大谷)

【共生学会と企業とがどのように関わるのか】

- ・ 大阪大学と連携している企業から参加してくださっているが、共生学会への関わりというのは、大学とオフィシャルに連携するという従来の関わりとは、性格が異なる。(栗本)
- ・ そもそも共生とは何か、どのようにしたら実現できるのか、それを会員それぞれの立場から議論していただくのが目標。(栗本)
- ・ 企業ではあるが、医療、介護の世界にいたので、「学会」については一定程度親しみがあり、実際に関連の学会にはいくつか参加している。(杉浦)
- ・ 企業の立場からどのような形で参加していくのかよくイメージできていない。(安田)
- ・ 関心ある人が自由に関われる場ということについては理解したが、何かアウトプットがあるのかどうなのか。(杉浦)
- ・ 気負いせずに参加していこうという姿勢で良いと感じた
- ・ 共生学会というのは内面的な部分を議論できる可能性があるのでは。(仕事で) 高齢者と対峙するなかで、家族との関係などが変わり、誰を頼りにするのか、という点に新しい問題が出ているところを感じるので、今回、共生学会に関係することで、そのような部分を勉強したいという動機がある。(國仲)
 - 既に医療、介護関係の学会へ参加されている方も。本学会では、そのような既に参加している学会で得られること+アルファが必要ではないか。(栗本)
 - 企業関係の方が共生学会に参加することの意義、あるいはどのように参加するのかを考える必要。(栗本)

GROUP 3

■記録：榎井緑（阪大・未来共創センター）

■参加者（6名）：飯嶋秀治（九州大学人間環境学研究院共生社会学准教授）、池田信虎（阪大・共生学系）、新宅太郎（社会福祉法人吹田市社会福祉協議会職員）、清家卓（西予市野村自治振興協議会・西予市役所職員）、橋本義範（非営利活動法人おおさかこども多文化センター事務局長）、榎井緑（阪大・未来共創センター）

【自己紹介・問題意識など】

●飯嶋：九州大学人間共生システム論という大学院でそこで博士論文も書いて現在准教授をしている。98年につくられた時、院生で「人間共生システム論」は何をすところかを教員に聞いたところ、「それはこれからおまえらが考えるんだ」と言われた。内側に入って教員になって、こういう感じで名前をつけていることがわかったが、当時自分は生真面目にやってきたし、98年からそれなりに博論を経由して、共生というものがどういうものなのか、どういうルーツでこれが出てきたのか勉強してきたので、人一倍「共生」に関心はある。

具体的には文化人類学を専門にしており、博士論文ではオーストラリアアボリジニ（250言語あり、自分がしゃべれるのはそのうちの1つ）の、飲酒をどのようにして止めるのかという研究をした。日本に帰ってきて、児童養護施設や児童福祉のところで、虐待や子ども同士の暴力を含め臨床家と共に具体的にどう止めたらいいのかという挑戦的なテーマで研究をしている。共生というのは何もかも許されるものではない。その後、九大に就職したので、水俣とかポスト公害やポスト被災地の研究を現地の人たちと一緒にやってきた。

●池田：大阪大学大学院人間科学研究科共生学系、共生の人間学博士後期課程所属。専門はミシェル・フーコーを中心としたフランス哲学と専門性が高い。この準備会に参加した経緯は、もともと関東で哲学若手研究者フォーラムという学際系で哲学系の学会の中では扱っている範囲が広い学会の運営をしていた。民主的に特定の人長くいないようにするため二年交替の任期を終えた。学会運営という学知を作っていく場所はそこであると学ばせてもらったが、これからはもっと大きなもの、市井の人々を巻き込むとか、趣意書に沿う形で人以外との共生ことも考えつつ、とはいえ学会として、学会という名前、形を保ちながらも共生の問題に取り組むということが、非常にチャレンジングであるとともに惹かれるものがあったので来た。趣意書も読んだし、冒頭の説明も聞いたが、具体的にどのように進めて行ったらいいかについては、みなさんと議論していかないといけないし、是非とも協力してやっていきたい。

●新宅：吹田市社会福祉協議会。学問としてどう考えるかということについては専門外であるが、実践者であり当事者であると考えていただきたい。社会福祉協議会そのものが地域福祉を住民とともにどう取り組んで行くかというもので、地域福祉が分野や年齢層を特定するのではなく、普段の生活の場自体が福祉活動の源と捉えている。地域共生

ということばは地域福祉活動の取り組みの原点ともいえる。今回設立趣意書を読み、一番共感するところは、「共生は与えられるものではなく我々自身が当事者」というところ。地域福祉も誰かがしてくれるとか、サービスの受給者、サービスの提供者と捉えるのではなく、みんながそれぞれ役割を担うことで、まちのしくみ、繋がりづくりに寄与していこうとするもので、そうしたことを日々実践している。その中で「共生」は、まさしく誰もが安心して暮らせる、漢字二文字で表すには一番よい表現と理解した。実践者として地域活動をコーディネートする側であるが、逆に家に帰ればまちの一住民、地域住民となる。その中でどのように地域福祉活動ができるか。一住民だからこそできることもある。それを「共生」という文字の中でどのように表現していくのか関心があり来ることとなった。共生学会設立についてはこれまでもこれからも議論があると思うが、日本地域福祉学会でも地域共生と使い、全包括的なケアや地域包括ケアなど共生ということばが外せない時代になっている。共生ということばが出てくるということはその反意語というのも存在する。そういう状況だからこそ地域共生ということばが使われているのだと思う。どう学問や理論に深めて行くかはわからないが、そこをみなさんと学ばせていただければと思う。

● **清家**：愛媛県予西市野村自治振興協議会という地域づくり団体で活動。予西市役所職員。会議に参加したのは、平成30年7月豪雨災害で大きな被害を受け、その後大阪大学からの支援を受けた。大阪大学と愛媛大学と3者で今後の地域の復興のために一緒に活動している。野村自治振興協議会には専門家がいるわけではなく、地域の人たちが一緒になって地域づくりをしていくというもの。学問的な部分について言語化は難しいが、実践者として携わらせていただきたい。田舎ではあらゆる地域課題がある。少子高齢化人口減少、それに伴う担い手不足、地域課題の解決を地域づくり団体が取り組んでいるが、それ以上に課題の拍車がかかっている状況で、それをどうするかと考えた時に、学問的に言語化して、地域づくりの発表の場があれば共有をはかり、課題に対して多くの人と共存共栄、共生していければ。実践の場として地域を選んでもらい、それをいろいろな場所で広めることのできる活動を大阪大学や愛媛大学には期待している。また、地域・田舎によっては、昔から残っている文化や伝統があり、そうしたところも面白がって来てもらっている。そうしたところも期待しつつ、特色のあるまちづくり、「共生」、おしなべてみなさんが同じ地域ではないと思うので、いろいろな特色を活かしながら、「共生」「共創」する活動をしていきたい。

● **橋本**：NPO法人、おおさか子ども多文化センターに所属。元々は高校教員。退職後、教員の間に関わっていた外国につながる子どもの支援をしたいと思いNPOで活動している。外国から日本に来る子ども、学業中に入ってくると困難なことがある。日本語ができない、日本の学校文化に馴染めないという子に支援をしたいということでできたのがこのNPO。多数そうした子どもたちが入って来る、その支援の仕組みができてきたのは、大阪で言えば2000年ごろ。その時に「多文化共生」ということばがいわれた。もう少し前の時代から言われていたのかもしれないが、わたしが意識したのはその頃。「共生」はすごく馴染みがあったが、この20年活動に関わって、これに「？」マー

クがつくことが良くある。本当に「共生」はどういう意味かずっと考えてきた。そのよ
うな時にこの学会が生まれそうだと誘われ、自分の思いや考えがどうだったのか、どう
なっていくのか、学びたいと思って来た。

【共生学会・準備委員会に対する意見など】

● **飯嶋**：もともと、この漢字（共生）について調べてきたので説明すると、浄土教にあり、読み方は「ぐしょう」だった。つまりあの世の浄土に生まれかわろうという時のことば。戦前に椎尾弁匡という人が「共生会」をつくり、それが1990年代に入り、色々な冊子や論文に取り上げられてきた。そこからわかるように、バブルが弾けた後に暮らしにくくなった。暮らしにくくなったからこそ「共生」がキーワードになってきたというのがこのことばの歴史。（人間共生論という授業を自分もしているが）学生たちには、これがターゲットではなく、具体的に目の前にあるのは「一緒にある苦しみ」＝共苦＝の方。それをどのようにして共生に向けていくのかというときのキーワードと教えている。災害や外国人の子どもがそれにあたる。外国人の子どもは児童養護施設によく合うパターンで、学校教育に児童養護施設から通っている子どもたちが世話になっていると思う。そういうところで具体的に考えていかないと空理空論のようになってしまう。実が無くならない様に気をつけないといけないと思う。また、学会としての懸念は、NPOでも経験しているが、ここに集まって来る人に関して、「共生」はいいことばなので、疲れてしまうことがある、悪くなれないというか、悪い顔を見せられない怖さというか、何でも受け入れなくてはならないかのような規範がそこはかとなくできてしまう雰囲気がある。NPOの時も舌鋒鋭い若者が入って来た時に誰も厳しく言えなくて、みんな言われっぱなしになってしまい、回らなくなってしまうことが正直あった。その現実の中で先生たちが疲れないようにやってほしい。

● **池田**：実践の人間でもなく、共生を研究しているわけでもないが、単純に懸念がある。意見をいただきたいといわれて、意見をするのが難しい。難しいのは共生ということ以上に何から話していいかわからない、と素朴に思う。具体的に、準備会でテーマを出して議論するような形式になるのかなと思っているが、その時に実直に地道に、意見をもらう時にどうやって意見をもらったらいいか。挙手制にするのか、何か書いて出してもらっても含めて、具体的に共生学会の運営という具体的な活動自体を取り急ぎ題目にして話していったらいいかと思う。そもそも集まりをどういう風にやるのか。現在カメラオフにしているが、若い人はカメラオフの方が気楽なんじゃないか。今6人中5人がカメラオンで自分だけカメラオフにしているとちょっとだけ悪い気持ちが出てくる。できれば会則のところに「カメラオフで参加してもいいですよ」の一言があると、入りやすい。本当にここで話すということについても、そういう小さいところから議論した方が、学会としての形式はできやすいのではないか。懸念としては、善意で皆参加していても、ハラスメントや衝突は起こりえるので、まず、会則を一端おく。意見の行き違いでそういうことしてしまったときにどうするかは一応先に設けておくといいかと思う。自分が経験したフォーラムもボランティアが善意で集まっていたが、今後そういう

ことができるかも知れないということで、ハラスメントに関する会則を設けることになったという経緯があり、最初からそういうものを盛り込んでおく（気をつけておく）いいかと思う。

● **新宅**：設立趣意書の中に「現場」ということばがでてくる。現場が何を示しているのか、生活する中に他人のことを考えたり、一緒に暮らすことを考えるということは大なり小なりある。卒業したからお終いでなく、暮らしの中にいつも出てくる普遍的なものだと思う。制度、政策、仕組み、サービスは時代とともに変わっていくが、他者とのつながり、あいさつ、助け合いはいつの時代も言われている。そこに如何に他者を理解してというのが「共生」、普段の生活の中でこそ実践、そこにバイブルとして「共生」というのがあれば、実践者として立ち戻れる場所になる。自分も地元に戻れば一地域の役員でおっさん。しないといけないというものもあるが、やるのが楽しいという面のアプローチがあってもいい。学会に呼ばれたのも、3年前の北部地震の際、渥美先生、稲場先生に支えてもらい、学生との繋がりが生まれ、学生を通じた地域福祉活動になり、そこで多様な意見が出てというというのが一つのヒントになっているのではないか。色々な人が出会えるすばらしさをこの中で体験できるという取り組みがやりたい。学問とは違うかもしれないが、そういう笑顔を広げていくというバイブルになればいいと思う。

● **清家**：学会ということに初めてで慣れていなく、発言することが通じるのかという不安があったので、先ほど意見を求められたときに二の足を踏んだという状態である。実践者としていろいろやってきた部分で手伝いできること、話しできること、など振っていただければ話せるかと思う。徐々に雰囲気慣れさせていただき発表の場という機会を伺いたいと思う。

● **橋本**：従来の学会があり（十分は知らないが）、日本語関係の学会や移住政策の学会など割と目的がはっきりしているが、共生学会は幅広い考え方を持っている方がたくさん入っていると思っている。魅力に感じるのはそこで、一つの目的にではなく、いろいろところで研究されている人、活動している人が自由に論議できる場であつたらうれしい。その辺は学会の運営を難しくするかもしれないが、いろいろな人の意見が聞ける場であってほしい。

GROUP 4

■記録：宮前良平（阪大・共生学系）

■参加者（6名）：神先真（北いわて未来ラボ）、石川浩二（NTN）、モハンマド・モインウッディン（阪大文学研究科助教）、知念渉（神田外国語大）、丸山政行（河森ゼミ博士後期課程）、宮前良平（阪大・共生学系）

【共生学への関心・意気込み】

●石川さん：共生というような難しいことはわからないけれど、今実務家として取り組んでいるものがボランティアやSDGsとつながっているのだと思う。実務的な側面から共生学に貢献したい。

●モインウッディンさん：文学部での研究成果が社会にどう役立つかを考えてきたが、共生学という枠組みで貢献できそうだと思います。参加した。研究者だけでなく、一般の人が使えるような研究成果を出していきたい。

●知念さん：志水先生が共生社会論に移られたということは知っていたが、自分も大学で共生社会論を教えることになり、そういう縁で今回参加した。専門は、社会学、教育・家族社会学、特に貧困やジェンダー格差の研究をしているので、こういう視点から共生学と関わるのではないかと考えている。

●丸山さん：専門は観光学。和歌山の白浜町出身。同じ生活圏なのに合併となると揉めだすということが不思議で研究している。観光は共生というテーマと近い。

【趣意書について】

●丸山さん：人と人の共生という狭い意味での共生だけでなく、自然との共生など広い視点で共生について考えようとしていることに関心を持った。学際的に取り組むということが必要になってくるのではないかと考えている。

●モインウッディンさん：共生学会のメンバーがどういった人になるのが気になる。自分としては、一般の人（研究者以外）や理科系の方も入ってきてくれるといいと思う。

●知念さん：最初に話を伺ったときに共生学会の特徴はどこにあるのかと思った。例えば人科も学際的にいろんなことをしようとしているけれど、内実はそれぞれが分離してしまっている。同じ用に教育学会も広いテーマを扱いながら、それぞれで分断があるように思える。共生学会でも同じ轍を踏まないようにしなければならないと考えている。

●神先さん：自分の本職が自殺対策のネットワークづくりと関わっていることもあり、コロナで平時からのネットワークは機能したかを検証したいと思っている。何かがあったから動くというのではなく、平時から活動しているということが大事だと考える。

●石川さん：私はずっと実務をしているので、「共生」と言われてもなかなかついていけなかったというのが正直なところ。これから学ばせていただきたい。それでも、趣意書で共生について考えられていることは漠然とはわかる。現場の人間なので、できるだけ現場から貢献したいと思う。

GROUP 5

■記録：渥美公秀（阪大・共生学系）

■参加者（7名）：上田真（パナソニックホームズ株式会社 街づくり事業部）、澤村信英（阪大・共生学系）、古舘良太（野田村 未来づくり推進課）、塚家由妃代（佛教大学准教授）、松村暢彦（愛媛大学）、塚家由妃代（佛教大学）、渥美公秀（阪大・共生学系）

【趣意書について・共生学会について自己紹介を兼ねて】

● 澤村

- ・ 趣意書は特に注意を払っていない。様々な方々と出会えることに感謝。
- ・ 実践の方々なしには成立しない

● 塚家

- ・ 障害・インクルーシブ教育を行ってきている。
- ・ 桂先生の資料にも書かれているが、ジェンダーバランスが悪い。
- ・ マイノリティを多数派とするようなことは無理か。
- ・ 当事者と研究者が入った学会に出ていたが、結局、当事者と研究者が分裂した。最初が肝腎ということに賛同。

● 古舘

- ・ 趣意書を読むと、役場でやっていることが共生に思える。
- ・ 共生と共創はどう違うのか。

● 松村

- ・ 共生という言葉が共生を妨げるのではないか。こういう言葉は使わない。
- ・ 結局論文なのか、発表なのか・・・それは研究者の成果。どう変える？

● 渥美

- ・ 現場の人にとって、学会はどういう意味があるのかを考えなければならない。
- ・ 趣意書は、趣意書なのに変更を許容している。そこが工夫である。
- ・ 桂氏のまとめはとてもよく書かれているので是非ご覧下さい。

【聖火リレーについて】

● 松村

- ・ 愛媛では知事の涙(事件)

● 澤村・渥美

- ・ 大阪では気づかない程度

● 塚家

- ・ 京都も見えないところで
- ・ 相模原事件の現場を聖火の中心地に使用とした市長は糾弾された
- ・ パラリンピック
- ・ スーパー義足で出場することは善いことかなどいい議論できる。

★渥美のコメント★

阪大の側でリードするのかどうかを事前に知らなかったの
で、最初は敢えて沈黙しました。また、何分あるのか、後で
シェアするのかなどもわかりませんでしたので、急ぎ議論
して余った時間は雑談しました。昨日野田村に聖火が来た
そうでその話題に。なお、パナホームの方はマイクが作動
せず、ご発言はありませんでした。なお、このメールは澤
村先生に共有されないのでしょうか？

GROUP 6

■記録：木村友美（阪大・未来共創センター）

■参加者（13名）：大川ヘナン（阪大・教育文化学講座）、河森正人（阪大・共生学系）、小島誠一郎（一般社団法人・地域情報共創センター・代表理事）、杉田映理（阪大・共生学系）、坪内好子（おおさかこども多文化センター）、檜垣立哉（阪大・共生学系）、藤高和輝（京都産業大学）、モハーチ・ゲルゲイ（阪大・共生学系）、小山冴子（フリーランス）、木村友美（阪大・未来共創センター）、桂悠介（共生学系院生）、宮前良平（阪大・共生学系）、榎井縁（阪大・未来共創センター）

19:05～モハーチさんから挨拶

19:13～宮前さんから、これまでの経緯の説明

19:24～榎井さんから説明と、自己紹介（あいうえお順）

● 小島さん

- ・ すでにある「共生」と名のつく学会と比較して、偏っていない学会、様々なトピックを網羅する学会となってほしい。
- ・ 地域安全学会の事務局として参画したことがある
- ・ 日本災害情報学会の立ち上げにも関わった

● 古怒田さん

- ・ 様々な立場の人が入りやすい学会になってほしい

● 坪内さん（西淀川、外国ルーツの子供の支援）

- ・ 共生という言葉はしっくりこない。
- ・ 大学の中から外に広げていこうという姿勢が興味深く、勉強させていただきたい。

19:58～ ディスカッション

- ・ 皆で連絡をとりあう、意見共有する、などのコミュニケーションのツールを何か考えているか？ Slackなどは、一案かと思います。（桂さん）
- ・ システム等のツールに関しては、皆で話あったあとにシステムに強い会社でつくることができる（小島さんの法人でサポート可能です！）